CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

ラフカディオ・ハーンの大阪見聞記

――四天王寺、妙国寺訪問を中心に――

永田雄次郎

はじめに

ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn（一八五〇―一九〇四）のエッセイ「大阪にて（In Osaka）」(1)は、大阪の人々にはあまり知られていない。遠田勝は次のように論じる。

実際、これほど精確に愛情濃やかに明治中期の大阪を写した英文を私はほかに知らない。愛郷の心あつい大阪の人々がなぜこの作品について注目しないのか、不思議に思えるほどである。(2)

大阪に生まれ育った一人ではある筆者も、この地で本作品について多く語られたことを知ることはなかったように思える(3)。ハーンは、明治二九年（一八九六）に大阪に行っている。その散策の印象は、後年、「大阪にて」となって刊行された。彼は、その古い歴史を回顧しながらも、一九世紀後半の大阪の賑わいの姿を生き生きと描写している。多くの寺院、神社へも足を向け、深い感銘を受けた。

ハーンの眼に映り、心を揺るがせた大阪について、友人の西田千太郎（一八六三―一八九七）やチェンバレン Basil Hall Chamberlain（一八五〇―一九三五）への手紙の記述などを交えながら、訪問した四天王寺、堺の妙国寺への

感懐を中心に、エッセイ「大阪にて」を読み解くことを始めてみよう。そこには、大阪人である筆者の思いもすこしく反映されることになるのであろうか。

（一）

明治二九年、ハーンは当時の活躍の地、神戸より、四月一五日付の一通の手紙を投函した(4)。それは、彼がもっとも信頼を寄せる友人の一人、島根県尋常中学校（松江中学校）教諭であり、同校校長心得をつとめ、教頭とも記されることも多い西田千太郎宛のものであった。

西田からハーンが以前よりも日本人について理解していると聞いた喜びに始まり、日本への帰化が認められたので、この年の九月、東京の文科大学にハーンを招くことになる帝国文科大学長、外山正一（一八四八―一九〇〇）からの書簡の宛名が「小泉八雲殿」になっていることに奇異な感じを受けたと、手紙は結ばれている。この中には、大阪にほぼ一週間行っていたことも書かれている。

よほど魅力的な大阪への旅であったのだろうか。同じく西田宛の手紙は、「東京において家賃はいらないといって一〇年間住むよりは、私は大阪で一ヶ月住むことを選ぶであろう」(5)と語る。例によって、ハーンの感情の起伏の大きさを示してはいるが、大阪に好感を抱いたのは事実のようである。この時の印象を綴ったのが「大阪にて」であることはすでに記した。

それでは、ハーンのほぼ一週間の大阪滞在は、具体的にはいつのことなのであろうか。西田へ手紙を書いた時期とさほど離れていない明治二九年四月がまず考えられよう。河島弘美はそのように論ずる(6)。だが、多くの文献では、同年二月となっている。一例を掲げてみよう。

二月下旬（推定）家族で伊勢旅行をする。現代的で、神聖さに欠けた土地の雰囲気に失望する。一雄に大きな木馬の玩具を買ってやる。帰路、大阪に一週間滞在する。(7)

本論の根拠となるのは、件の四月一五日、西田宛の手紙である。

I have been away. I have been at Ise, Futami, and nearly a week in Osaka.(8)

ここで、伊勢、二見への旅行と大阪滞在が明らかで、両者は連続したものと見做されることが多くなる。ハーンの長男、小泉一雄（一八九三―一九六五）は、次のように書き記している。

父は、明治二十九年神戸クロニクルを退社して東京大学（帝大）の講師として東上することになったので、この年は妻子を連れて、伊勢、京都、大津付近、大阪付近および出雲と旅行したとのことです。（中略）伊勢へ行ったのは二月だったそうです。(9)

当時三歳の一雄の記憶を基に、ハーンの二月、家族連れでの大阪滞在という説が成り立つ。これを補う資料として、明治二九年七月八日付、これもハーンの友人、チェンバレン（当時は東京帝国大学名誉教師）宛の手紙がしばしば引用される。

But later on I was able to visit Ise and Horyuji, and to make studies in Osaka.(10)

この二月の伊勢、大阪連続旅行説に対し、「大阪にて」で、大阪を訪れた季節を暗示する記載を見出すことは不可能なのであろうか。

先日、私が見た景色というのは、春の靄（または霞 a spring haze）によって、うっとりとさせられたものであった。それは早朝のことである。(11)

「早朝のこと」の部分を平井呈一は、「時は春暁」(12)と翻訳する。さらに、「たたずむ橋の上から、二百ヤードほど離れたあたりの家並みが、まず薄青く明けそめて、そのさきはいちめんの靄が立ちこめ、その靄のかなたはいきなり朝

日のなかに溶けこんでいるようなそのときの景色は、まるで一場の夢のけしきであった」[13]と続ける。春の景の描写である。また、靄でなく霞であれば、『古今和歌集』[14]の一首が、まず思い浮かぶ。

霞たち　木の芽も春も　雪ふれば　花なき里も　花ぞ散りける（紀貫之）

まさに早春である。ただし、同じく『古今和歌集』で霞は、次のようにも詠まれる。

春霞　なに隠すらむ　桜花　散るまをだにも　見るべきものを（清原深養父）

眼前の春は盛りの桜の花を隠す霞という描写は、霞が持つスケールの大きさを表現している。他にも、これと似たような例が存在するところから、早朝の景を幽かに揺るがせる haze は靄と訳すことがより適切なのであろうか。しかし、いずれにせよ、ハーンが「大阪にて」で描いた景は春の朝であることは重要な意味を有している。

（二）

春を暗示させるものとしては、もう一つ、彼の泊まった宿の床の間に飾られた花があげられる。

床柱には、この上もなく美しく咲いた一対の藤の花（wistaria）の小枝――一枝はピンク、もう一枝は白――を入れた竹の花筒が掛けられていた。[15]

ハーンが見たと記述する藤の花は、通常、春から夏へ季節が移り変わる頃に咲く。再び、『古今和歌集』を繙こう。

三月の晦日の日、雨の降りけるに藤の花を折りて、人につかはしける

ぬれつつぞ　強ひて折りつる　年のうちに　春は幾日も　あらじと思へば（在原業平）

この和歌は「巻第二　春歌下」に入れられるが、「巻第三　夏歌」は次の一首に始まる。

わがやどの　池の藤波　咲きにけり　山時鳥　いつか来鳴かむ（よみ人しらず）

『古今和歌集』の春、夏いずれにも藤の花を詠んだ歌が登場するのは、まさにこの花の咲く時節が季節の移行期であることを物語っている。藤は早春の花ではない。二月に伊勢に旅行をして、その帰りに大阪に向かったとすると、季節感において本エッセイの記述にはずれが生じるように思えてくる。伊勢旅行が二月末で、三月初めに大阪に行ったと仮定しても、微妙な異和感を覚えてしまう。

三月初旬、実際に藤の花を眼にすることは可能なのか。植物に携わる人たちは、おそらく不可能であると答えるだろうとの話を聞いた[16]。造花であればとの考えもあるが、ハーンの描写、大阪の宿での立派な飾りつけからは、そのような演出はしないと思われよう。他の種類の花を藤と見誤ったとの説も成立しないこともないが、藤のような特徴のある花と間違うような花が存在するのか否か、その可能性も低いと思える。このような状況を考慮すると、二月末から三月初めにかけての大阪への旅立ちということは考え難くなる。

二月の伊勢旅行の帰りに大阪に立ち寄ったのだが、その時期を少し変更して、藤の花咲く春にその地を訪れたことにしようとの意図がハーンにあったとの説も成り立つかも知れない。西田宛の手紙は次のように語る。

Besides, it was bitterly cold, and hurt my lungs. I came back sick. Ōsaka delighted me beyond words.[17]

伊勢旅行中、ハーンは寒さから胸が痛くなり、おそらく風邪をこじらせて神戸に帰ってきたことが判明する。そして、大阪で言葉にならないほどの楽しみを得たと続けている。病気になったハーンが、すぐに大阪で楽しい気分になったとは考えられず、二つの文章の間には時間の断絶があるように思われてならない。三月初めの大阪への旅行ではなく、もう少し後になって、あらためての訪問との説が浮上する。それはいつの頃であろうか。西田宛の手紙が四月一五日に書かれたのであれば、その少し前の日が大阪旅行の下限となる。三月末から、特に四月一〇日ぐらいまでであれば、藤の花を見る可能性が少し出てくる。

問題となるのは、チェンバレンに送った七月八日の手紙の記事である。そこには、最近、伊勢、法隆寺に行き、大阪について研究できたことが記されてあるが、この記述に関係して、五月一〇日付のハーンから西田宛の新たな手紙の内容が注目されてくる。

I have been to Horyuji and Miidera and Ishiyamadera.(18)

四月一五日の手紙の彼、ハーンは法隆寺、三井寺、石山寺を訪問したことを西田に伝えている。そうすれば、ハーンは四月一五日までに伊勢、大阪に行き、しばらくして、五月一〇日までに奈良、滋賀を訪れていることになる。余談になるが、そのいずれにも小泉一雄が同行していることもすでに明白である。

チェンバレンへの手紙は、奈良などの訪問より約二ヶ月経過した時のものであり、伊勢、大阪、法隆寺へのハーンの旅行をまとめて報告したと解釈するのが妥当とも思えてくる。彼の大阪旅行の時期が伊勢旅行より少し隔たりのある四月初め頃であれば、本エッセイの春の描写に近いものとなろう。だが、ハーンの「大阪にて」はそう単純ではない。最後は左のように結ばれている。

奈良行きの夕方の列車がこの大都会の賑やかな喧騒（cheery turmoil）から私を遠くに運び出してくれる時、その想いについて私自身不思議な感じを持ち始めていることを理解した。(19)

あたかも、彼が大阪の次に奈良に向かうことを読者に暗示させるような表現である。二月末もしくは三月初めの大阪への旅と藤の花の組み合わせも彼一流の巧みなフィクションなのではないかと思わせるにも至る。読者には、少し重味を持つ心の揺らぎを覚えさせる。なかなか、一筋縄では行かない。

（三）

「大阪にて」は六節に分けられている。河島弘美は、第一節　大商業都市大阪の概略、第二節　その魅力、第三節　丁稚奉公のしきたり、第四節　寺社について、第五節　日本の家屋とくにその室内の趣味のすばらしさ、第六節　労働を成り立たせている素朴な信頼関係と、各節の特徴を的確にまとめている[20]。その冒頭には、『水鏡』において、仁徳天皇の作とする和歌を置く。

高き屋に　登りて見れば　煙立つ　民のかまどは　賑はひにけり[21]

第一節で、ハーンは明治二九年現在、大阪は二五〇〇年以上の歴史を有する日本でもっとも古い都市の一つであると指摘する。古都といえば、まず奈良、京都を多くの人々は思い浮かべるであろう。八世紀の奈良は、天平という時代に偉大な文化を築き上げた。しかし、その影響は現代にまで続いているとは思えず、「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」[22]と小野老が歌いあげる一首によって、古き都が当時そこに存在したとの憧れを抱きながら感慨にひたる地であるような気がしてならない。

京都は、王朝風の雅びに支えられた文化が一つの伝統となり、その風物が今にまで至るような感情を持って捉えられることが多い。新しき都市東京とは異なる、独自の文化を持ち続ける古い都との認識である。

それらに比して、ハーンによって、奈良、京都より古い都市が大阪であると示されても、その考古学的時代の古さゆえに、今日、地元の大阪人の間でさえも、「古都」との思いが消え去ってしまっているのかも知れない。虚を衝かれた感がする。彼は、仁徳天皇を主祭神とする高津社（高津神社）を訪れ、「彼（仁徳天皇）の神社が今建っているのと同じ場所に、一つの宮殿をつくった」[23]と記す。そして、本エッセイ冒頭の和歌に関連した、民のかまどに立つ

煙を見るという『古事記』の記述に対し、次のように続けている。

今、このすばらしい天皇が高津の彼の宮から見ることができたとしたならば、――数万人の人々が、天皇はそのように為したと信じているのだが――天皇は昨今のその煙を見て、「私の民は富み栄えている」と考えるに違いない。[24]

高津神社の地が仁徳天皇の高津宮である確証はない。だが、当時の大阪の人々は、この地が高津宮であると信じているとハーンは述べる。高津神社が高津宮と認定されるのは、明治三二年（一八九九）のことで、彼の同地訪問の三年後である。同年九月、高津神社、難波神社などにおいて「仁徳天皇千五百年祭」が挙行される。そのために、長く不明であった高津宮の場所を確定する必要が生じ、種々の説の中で選出されたのがこの地であった。現在、高津神社の地が高津宮に該当するとの説は否定されている。「仁徳天皇千五百年祭」、高津宮の確定とその後の顛末については、伊藤純「近代大阪における歴史の創造――仁徳天皇千五百年祭をめぐって」[25]に詳しい。

明治三二年、ハーンは東京に住んでいた。「仁徳天皇千五百年祭」について知らないはずはなく、その盛り上がりを喜び、高津神社を訪れた時を懐かしく思い出していたことだろう。三年前の訪問で、大阪の人々がすでに高津神社を高津宮と信じていた事実を彼が明らかにしていることは、当時の大阪を知る上で重要な描写となっていよう。

（四）

ハーンは何の目的で大阪に足を向けたのであろうか。「大阪にて」の第四節の初めに、「私は、お寺を見ること、特に有名な天王寺を見ることが主目的で大阪に行ったことを告白する」[26]と記す。本エッセイで第四節の重要性が認識される。彼は四天王寺（この寺院は、「天王寺さん」と親しまれて呼ばれることもあるが、正式には四天王寺なの

で、以下、原文に対する訳語を含め、四天王寺と表記する――筆者）の印象を西田宛の四月一五日付の手紙に語っている。

And I could never tell you how Tennoji delight me–what a queer, dear old temple.[27]

口ではその魅力を充分に表現できないほど楽しんだと評するハーンの四天王寺見学であるが、その気持ちを、「風変りな（queer）」と「古い（old）」との言葉を組み合わせることによって書き記しているのは、はなはだ興味深い。

狭く賑やかな商店街を通って、四天王寺の境内に入った時、ハーンが訪れた年から一二〇〇年前に時間が遡る気分を彼は味わったのであろう。日本人とて同じく感じることである。日本最古の寺院の一つである四天王寺が幾多の戦乱、災害によって創建当時の伽藍でないことを彼自身は自覚している。その四天王寺は、文化九年（一八一二）再建の姿であった。彼はそこにも「古さ」を見る。

（四天王寺の）古めかしい外観や境内の奇妙にもの悲しい美しさを文章で表すのは無駄なようである。天王寺がいかなるものか知りたければ、人はその朽ち果てた不思議な感じを味わう必要がある。（中略）幻想的な（fantastic）な五重塔、それは今や荒廃した（ruinous）思いがする。[28]

半ば廃墟化した風情すら持つ四天王寺の奇しき美しさを、たとえ江戸時代後期の再建の姿の中にでも「古さ」を伴って見ることは可能である。第二次世界大戦の空襲によって焼失した、元和四年（一六一八）建立の「東大門」も見ている。古きものは美しい。ハーンの眼も心も、遠く聖徳太子の生きていた美しい時代に向かうノスタルジックな思いで満たされている。太子堂で「聖徳太子摂政像」を拝観する機会も得た。

それでは、「風変りな」気分をどこに求めるべきであろうか。「ここには多くの奇妙なものごとがある。その中で私のもっとも風変りと思えた体験（my queerest experiense）の二つ三つを述べることにしよう」[29]と語り始める。

彼は境内の一つの建物を見つめる。二層の中国風のそれは、昭和三八年（一九六三）再建後の四天王寺では、北鐘

堂と呼ばれる。天井には鐘が吊るされており、一階は礼拝堂となっている。その鐘が、ハーン訪問時も、今日も「引導の鐘（引導鐘）」の名で知られる。これは、南の引導鐘に対応して、現在、北の引導鐘と称されるが、一般に「引導鐘」とされるのは北の引導鐘である。これら南北の引導鐘は、黄鐘調、盤渉調の二鐘と解説されることも多い。

「引導の鐘」の名の由来についてハーンは、「その鐘の音は、子どもの霊を冥途に導く」[30]ことにあると記す。堂内に置かれるおびただしい子どもの玩具などを見て、この堂宇は幼くしてこの世を去った子どもたちを供養する場としての意味を同時に理解する。礼拝堂で読経する僧侶が天井からの、子どものよだれ掛けでつくった綱を引き、鐘を鳴らす。鐘の音が境内に鳴り響く。その雰囲気をハーンは、「風変りな」体験の一つとした。今日では、北の引導鐘の音はあの世（極楽浄土）まで響くと、四天王寺七不思議の一つに数えられ、先祖供養の鐘の音としてやや乾いた音色で響きわたっている[31]。礼拝堂には子どもの玩具などは見ることもなく、天井からの綱も、ごく一般に使用されるものと同じであり、ハーンの描き出した景色とは異なってしまっている。

二番目の「風変りな」体験として、北鐘堂近くの亀井堂の様子が取り上げられている。ハーンには、亀の形をした石像の口から水が流れ、水盤に白い多くの紙が見えた。その紙には戒名が書かれ、先祖供養の意味を有する行事であることを知った。「この水は、死んだ者の戒名と、生きる縁者の祈りを聖徳太子のところへ運び、太子はその信心深さを阿弥陀如来に取りなす」[32]と、庶民、特に大阪の庶民と四天王寺縁りの聖徳太子の結びつきを記事としている。ここに、四天王寺の庶民性を見たのであろうか。

しかし、一般的には、「春秋の彼岸やウラ盆には、参詣者は各自に志す仏の仏名を記した経木をこの引導鐘堂へ納めて回向を頼み、そのあとは亀井の水へその経木を流すのが風習となっている」[33]と思われている。ハーンは薄い経木を紙と見誤ったのだろうか。他の堂からでもよいが、経木を持つ参詣者は北鐘堂からすぐ近くの亀井堂へ流れると考えるのが通常で、多くの人々はそのように歩き、ハーンの足の方向もそれに従ってはいる。

「回向（供養）を済ませた経木は当堂の亀甲の水盤に流す。一旦、水の中をくぐった経木は水面に浮いてくる。昔の人々はそれを見て『ああ、これで浮かばれた』と安心したと云う」[34]と四天王寺の案内書の通り、より庶民の信仰の姿をそこに見る。ハーンにとっては、聖徳太子建立の由緒正しき四天王寺こそは、歴史の古さが醸し出す、幾分荒廃したロマンティックな風情の漂う大寺院とその眼に映ったが、一方で活力に富んだ庶民的信仰の場であることも理解された。正統性と庶民性の混在、それが「風変りな」と「古い」の言葉の融合として捉えられたのである。

今日も変わることのない石の鳥居から西大門（極楽門）までの賑わい、回廊を越えて見える五重塔、善男、善女の祈りの中に響く引導の鐘の音、このような四天王寺にハーンは行きたかったのである。

（五）

四天王寺のほか、今回の大阪滞在中、ハーンは多くの寺院、神社を訪れている。四天王寺の近く、逢坂を少し下ったところの一心寺は、永代供養などで今も賑わう寺院である。彼がそこで興味を持ったものは墓石であったらしい。現在の北門を入ってすぐ近くにある三基の墓石について記している。

「旭五良八郎」と名の刻まれた墓について、「一トンもあるかと思われる、大きな円盤形の石に、力士の名前が彫ってあって、その丸い石が、石で刻んだ力士の像の背中にのっかかっているのだ（平井呈一訳）」[35]と描く。この人物については、残念ながら、詳しく知ることはできない。墓石の力士の眼は金色に塗られているのでグロテスクであるとハーンは述べる。この墓は明治二三年（一八九〇）建立と墓石の裏側に彫られているので、彼の訪問時は、まだ金色の眼であったのだろう。

「旭五良八郎」の墓の斜め向いの「大きな石の狸がつっ立って、腹鼓を打っている石塔（平井呈一訳）」[36]は井上伝

之助のものであり、そのユーモラスな造形は、今もほほえましく思える。その並びに「平山半兵衛」の名が記された瓢箪形の墓が立っている。平山半兵衛（一八一三―一八九一）は、播磨出身、明治一〇年（一八七七）頃、大阪の末吉橋に料亭「播半」を創業した人物として知られる。墓石の瓢箪の形は、平山の奉公先の主人、吉野五運が送った徳利の瓢箪形を、後年平山家の家紋に定められたことに由来する[37]。墓前には、「石匠新川　太田伝吉」と作者の石碑も立つ。これら三基の奇妙な形状がハーンにエキゾチックな感じを抱かせ、「大阪にて」の中に書かせるに至ったのであろう。

四天王寺に対比する寺院として、東西の本願寺をハーンは掲げている。その威容は、今、御堂筋に面する、北御堂（西本願寺津村別院）、南御堂（東本願寺難波別院）に受け継がれている。さまざまなロマンを生み出している「御堂筋」の名は、この両御堂に因んでいることを思い出す必要があろう。

神社としては、高津神社を訪れ、その思いを綴っていることはすでに述べたが、大阪の南に属する名高い住吉神社にも行っている。参道の多くの石灯籠に眼を奪われ、反りの大きな太鼓橋を渡ったことであろう。

住吉神社からさらに南に伸びた道、それは堺へ至る街道でもある。その道すがらであろうか、安立町の茶店「難波屋」にハーンは立ち寄る。「難波屋」といえば笠松が名高く、そこを訪れる客が、「名物の松を木版彫りにした絵だの、この松を詠んだ歌人の歌を印刷に附したものなど、女の子のさす簪などだ。簪は、名物の松の姿をそのままに、丸太の足場までそっくり模して、その上のところに、かわいらしい鶴が一羽とまっている（平井呈一訳）」[38]などの土産品を買う場面に出会っている。

『摂津名所図絵』[39]には、これとほぼ同様の情景が描かれ、その挿絵の上部に紀貫之の「世中に　ひさしきものは雪のうちに　もとの色かへぬ　松にそ有ける」[40]との一首が添えられている。絵画はモノクロームであっても貫之の詠む古典の世界から抜け出してきたような名松「笠松」は、その緑を鮮やかに、私たちを美しくゆったりとした時の

流れに誘う。

（六）

明治二九年春の大阪旅行中、前半なのか後半なのかは不明だが、堺を歩くハーンの姿があった。再び、四月一五日付、西田千太郎への手紙の一部を書き出してみよう。

I went to Sakai, of course–and bought a aword,[41]

「もちろん堺に行った」との記述の中に、ハーンの心に大阪の堺という都市への強い意識が存するのを見る。松尾芭蕉の「江山水陸の風光数を尽くして、今象潟に方寸を責む（『おくのほそ道』）」[42]の文章が思い出される。「堺に方寸を責む」の気持ちの高揚が、この of course の言葉として表われている。今度の旅行の目的の地の一つとして堺があった。堺見物の様子は、西田宛の手紙、「大阪にて」に描かれるが、その内容が両者で大きく異なっている。

ハーンは、刃物の町、堺で刀を買った。ハーンと刀といえば、「知られぬ日本の面影（Glimpses of Unfamiliar Japan）」の終章「さようなら（sayōnara!）」を思い出す。明治二四年（一八九一）一〇月、島根県尋常中学校を去るハーンに二五一名の生徒たちは、餞別の品として大名時代の日本刀一振を送った。その品を彼は非常に喜び、一〇月二九日の送別会で、生徒代表、大谷正信の送辞を受けてお礼の言葉を述べた。

私は諸君よりの贈り物を拝見した時、あなたがたの国の諺を思い出しました。「刀はサムライの魂である」（中略）私たちイギリス人もまた刀についての有名な格言や俚諺を持っているのです。私たちの国の詩人たちは名刀（a good blade）のことを、信頼（trusty）や忠誠（true）と呼んでいます。[43]

ハーンは、彼に生徒たちが教えてくれた精神として、寛大さ（generosity）、親切（kindness）、忠義（loyalty）

を挙げているが[44]、それが「サムライ」を象徴し、その魂やそのものである日本刀を贈られることは喜びであると語る。堺でも日本刀を手に入れた。

「サムライ」の精神が、西田宛の手紙と「大阪にて」における堺の記事の内容に大きな相違を生む契機となった。「大阪にて」で、ハーンは妙国寺という寺院に行き、その寺の蘇鉄にまつわる逸話を紹介している。

戦国時代天下統一を志した織田信長は、その権力を以て天正七年この蘇鉄を安土城に移植したのですが、毎夜「妙國寺へ帰ろう」と云ふ怪しげな声が城中に聞え霊気が城中を悩ますに至りました。激怒した信長は士卒に命じ蘇鉄を切らせたところ、鮮血切口より流れ悶絶の様は恰も大蛇の如く見え、さしも強気の信長も怖れ即座にこの樹を当山に返し届けたといわれています。[45]

織田信長という武将が登場し、蘇鉄を刀で切るとそこから鮮血が流れるとは、真にハーン好みの怪奇的な伝承である。『怪談（Kwaidan）』につながる世界が見えてくる。「大阪にて」のこのエピソードの終りは、「蘇鉄という木は鉄を好み、そのさび（rust）を吸って強くなるということである」[46]と結ばれる。しかし、西田宛の手紙に描かれた堺の内容は、それとはまったく異なっている。

I went to Sakai, of course–and bought a sword, and saw the grave of the eleven samurai of Tosa who had to commit seppuku for killing some foreigners–[47]

ハーンは、外国人を殺傷したことで切腹した土佐藩の一一人の「サムライ」の墓を訪れる。慶応四年（一八六七）二月一五日、フランス軍艦デュクプレス号から二隻のボートで数十名のフランス兵士が堺に上陸した。言葉が通じない故か、彼らと警備を担当する土佐藩士の間でいざこざが起こり、一一人のフランス兵士を土佐藩士が殺害した。いわゆる堺事件である。事件が発生した現在の栄橋通二丁目には、「明治初年仙人撃攘之処」の碑が建っている。フランス軍の強い抗議により、二月二三日、妙国寺境内で土佐藩士二〇名が切腹を命じられたが、一一名が切腹した時、

その凄絶な情景にフランス軍は以後の切腹を中止した。土佐藩は、彼ら一一名を妙国寺と道をはさんだ向かい側の宝殊院に葬った。その墓所にハーンは立ったのである。どのような思いが彼の胸中に去来したのであろうか。手紙は次のように続けられている。

and told them I wish they could come back again to kill a few more who are extraordinary lies about Japan at this present moment.(48)

「彼ら（土佐藩士）が、今ここに再び帰って来て、現時点で日本について嘘を書き続けている者二、三人を殺すことも許される」とは、何とハーンの心に激情が走っているのか不思議ですらある。日本の「サムライ」、その精神に基づく行為に対し、強い同情心が窺われる。「日本刀はサムライの魂である」との言葉を強調するのである。

それならば、「大阪において」では、どうして堺事件ではなく、妙国寺の蘇鉄の話に差し換えたのであろうか。築島謙三は、「ラフカディオ・ハーンの多数の著作はすべて欧米人に読ませるためのものであって、日本の読者にあたえるためではなかった」(49)と論ずる。この立場をハーンが取る限り、堺事件の土佐藩士に対して同情を寄せる記述を躊躇わせたと解するのが妥当であったのだろう。日本刀の切れ味を尊びつつ、欧米人が好むエキゾティックで奇怪な話を妙国寺に結びつけざるを得なかった。

一方、日本人である西田千太郎には、ハーンのサムライ魂への尊敬と日本刀の関係を明らかにし、乱暴狼藉を働いた外国人への怒りを直截に申し述べたのである。古い都市、有名な都市堺を訪れることは、もちろん楽しみにしていながら、欧米人向けの著作と日本人への手紙の内容の使い分け、ここにハーンの身上も読み解くダイナミックなおもしろさが存していよう。

おわりに

伊勢旅行に少し失望したハーンは、芸術家の眼と心を駆使して、大阪の旅で大きな収穫を得た。本稿で論じた四天王寺、妙国寺などの名刹を巡ることのおもしろさにとどまらず、ハーンの生きる近現代の大阪（明治以前の大坂を含めて）の活力ある都市を描写した。その記述は、現代の大阪人にも充分に刺激的である。

東京の町を歩くことも楽しいが（ハーンには怒られそうではあるが）、大阪の町を歩くことも楽しい。もちろん、四天王寺、妙国寺などを訪れることも楽しい。先日も筆者は、博労町、北久宝寺町、久太郎町、農人橋などを歩いていた。今も、ハーンの描く大阪と同様の活気もさほど失われておらず、その町々の歴史の中に身を置く喜びを味わった。大阪の町いまだ衰えずの感に、大阪人として自身の嬉しさを伴いながらの徘徊である。

日を変えて、高津神社にも足を運んだ。ハーンは、奈良、京都より古い都として大阪を意識したが、真偽はともかく、仁徳天皇の故事とともに、この地は古き歴史の都であるとの思いが湧き上がるのを実感した。「大阪にて」を楽しく味わうことのできた喜びに満たされながら、子どもの頃、よく歌った（歌わされた。ただし、この曲は今でも好きである）「大阪市歌」の一番が思い出された。この曲の歌碑は、高津神社にある。

高津の宮の昔より
よよの栄を重ねきて
民のかまどに立つ煙
にぎわいまさる　大阪市
にぎわいまさる　大阪市

（堀沢周安作詞　中田章作曲）

註

(1) Lafcadio Hearn : Gleanings in Buddha-Fields, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）を使用

(2) 平川祐弘監修『小泉八雲事典』（二〇〇〇年　恒文社）『仏の畑の落穂』の項（遠田勝　担当）

(3) 平川祐弘監修『小泉八雲事典』（前掲）「大阪」の項（河島弘美　担当）、『仏の畑の落穂』の項（遠田勝　担当）、川谷恂郎「ハーンの大阪紀行」（『へるん』第22号　八雲会）などがある。

(4) 島根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会、島根大学ラフカディオ・ハーン研究会編『教育者ラフカディオ・ハーンの世界――小泉八雲の西田千太郎書簡を中心に――』（二〇〇六年　㈲ワン・ライン）本書では、一八九六年四月一五日と日付が特定されるが、Lafcadio Hearn : Life and Letters 3 Edited by Elizabeth Bisland, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）では、四月とのみ記されている。本稿は、島根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会本を使用した。

(5) 同右

(6) 平川祐弘監修『小泉八雲事典』（前掲）「大阪」の項（河島弘美　担当）

(7) 坂東浩司『詳述年表　ラフィカディオ・ハーン伝』（一九九八年　英潮社）

(8) 註(4)に同じ

(9) 小泉一雄『父「八雲」を憶う』〔小泉節子・小泉一雄『小泉八雲　思い出の記・父「八雲」を憶う』（一九七六年　恒文社）に所収〕

(10) 八雲会編『小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集　第2巻　未刊行書簡』（一九九一年　雄松堂出版）

(11) 註(1)に同じ

(12) 小泉八雲著・平井呈一訳『仏の畑の落穂他』（一九七五年　恒文社）

(13) 同右

(14) 奥村恆哉校注『古今和歌集』（一九七八年　新潮社）

(15) 註(1)に同じ
(16) この事項については、関西学院施設部技能士　田中健二氏にご示教いただいた。
(17) 註(4)に同じ
(18) 註(10)に同じ
(19) 註(1)に同じ
(20) 註(6)に同じ
(21) 註(1)に同じ
(22) 木俣修『万葉集――時代と作品』（一九六六年　日本放送出版協会）
(23) 註(1)に同じ
(24) 同右
(25) 伊藤純「近代大阪における歴史の創造――仁徳天皇千五百年祭をめぐって」〔橋爪節也『大大阪イメージ　増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（二〇〇七年　創元社）に所収〕
(26) 註(1)に同じ
(27) 註(4)に同じ
(28) 註(1)に同じ
(29) 同右
(30) 同右
(31) 四天王寺発行の案内書による
(32) 註(1)に同じ
(33) 牧村史陽編『大阪ことば事典』（一九七九年　講談社）「インドガネ」の項
(34) 註(31)に同じ
(35) 註(12)に同じ
(36) 同右
(37) 一心寺発行の案内書「一心寺　墓碑銘々伝」

(38) 註(12)に同じ
(39) 秋里籬島『摂津名所図会　第一巻』（一九九六年　臨川書店より復刻）
(40) 木村正中校注『土佐日記　貫之集』（一九八八年　新潮社）
(41) 註(4)に同じ
(42) 顕原退蔵・尾形仂『新訂　おくのほそ道』（一九六七年　角川文庫）
(43) Lafcadio Hearn: Glimpses of Unfamiliar Japan, Houghton Mifflin Company 版（1922）（一九八八年　臨川書店より復刻）を使用
(44) 同右
(45) 妙国寺発行の拝観のしおり「元皇室勅願寺　本山妙國寺縁起」
(46) 註(1)に同じ
(47) 註(4)に同じ
(48) 同右
(49) 築島謙三『増補ラフカディオ・ハーンの日本観』（一九七七年　勁草書房）

附記

本稿の成るにあたっては、本当に多くの方々からさまざまなご示教、ご助言を得た。特に関西学院施設部技能士　田中健二氏、関西学院大学文学部　榎本庸男教授からは、重要なご示教、ご指導をいただいた。末筆になってしまったが、お二人に、心より深い感謝の意を表して本稿を終えることにしたい。

――文学部教授――